

知事選 3氏が立候補

仲井真氏 事実上一騎打ち

任期満了に伴う第11回県知事選が11日告示され、午前10時までに、届け出順で無所属現職の仲井真弘多氏(71)＝自民県連、公明推薦＝、無所属新人で前宜野湾市長の伊波洋一氏(58)＝社民、共産、社大推薦＝、宗教法人「幸福の科学」を支持母体とする政治団体「幸福実現党」の金城竜郎氏(46)の3人が立候補を届け出した。仲井真、伊波の両氏が事実上の一騎打ちを展開する。各候補は出発式で第一声を放ち、街頭遊説に繰り出した。28日に投開票される。

28日投開票

焦点である米軍普天間飛行場の返還・移設問題では、名護市辺野古移設を明記し

た日米合意の見直しと県外移設を求める仲井真氏と、県内移設反対を前面に米側のグアム移設計画推進を主張する伊波氏の主張が異なる。

政権与党の民主は自主投票を決めたが、「最低でも県外」方針を翻して県内移設方針に回帰したことへの世論の反発は根強い。県民の



仲井真 弘多氏

21世紀ビジョン実現する
ウチナンチュの誇りをもってあらゆる難問題に挑戦する。私には夢がある。21世紀ビジョンの実現だ。それには一括交付金、新しい振興法、基地跡地利用法が必要だ。必ず実現させる。普天間基地は日米合意を見直してもらい県外へ移す。日本全体で安全保障問題は考えてもらう。県立郷土劇場を造り、サッカー場も完成させる。空手会館も造り、北から南までの鉄軌道導入に取り組む。

仲井真弘多氏(なかいま・ひろかず) 1939年8月19日生まれ。那覇市出身。東京大工学部卒。61年に通産省(現経済産業省)入省。90年に大田昌秀県政下で副知事。沖縄電力社長や県商工会議所連合会会長などを歴任し、2006年知事選で初当選した。



伊波 洋一氏

ぶれずに新基地建設反対
普天間基地の県内移設に反対する県民の思いを受けて立候補した。ぶれることなく辺野古への新基地建設に反対し、埋め立てを認めることはない。日米両政府から県内移設の余地がまだあると思われている相手候補に、県民の思いは託せない。平和な沖縄をつくり、県民の暮らしを守ると約束する。県庁を県民の福祉や医療、教育を守る砦(とりで)に変えていこう。沖縄版ユーティール政策で産業を興す。

伊波洋一氏(いは・よういち) 1952年1月4日生まれ。宜野湾市出身。琉球大物理学科卒。74年宜野湾市役所入り。市職労委員長、中部地区労務局長を経て96年県議選で初当選。2期目の2003年に市長選に出馬し、初当選。2期目途中の10月に辞任した。



金城竜郎氏 尖閣を守る

審判は、返還合意から14年を迎えた普天間問題の行方や日米両政府の対応を左右する。先島への自衛隊配備計画や、県立病院改革・看護学校民営化なども争点だ。仲井真氏は那覇市の久茂地交差点前で第一声を放ち、「沖縄21世紀ビジョンの実現へ一括交付金や新しい振興法をつくる」と訴えた。多くの支持者に送り出され、中南部の遊説に繰り出した。県庁前の県民広場で開いた出発式で伊波氏は「選挙で県内移設反対の県民意思をしっかりと示そう」と訴えた。支持者の拍手に送り出され、出身地の宜野湾市などでの街頭演説に向かった。

金城竜郎氏は那覇市前島で第一声を上げ、「沖縄、尖閣を守ることを第一の政策に掲げてきた。普天間基地の辺野古移設による日米同盟強化、先島への自衛隊配備で県民を守る」と訴えた。

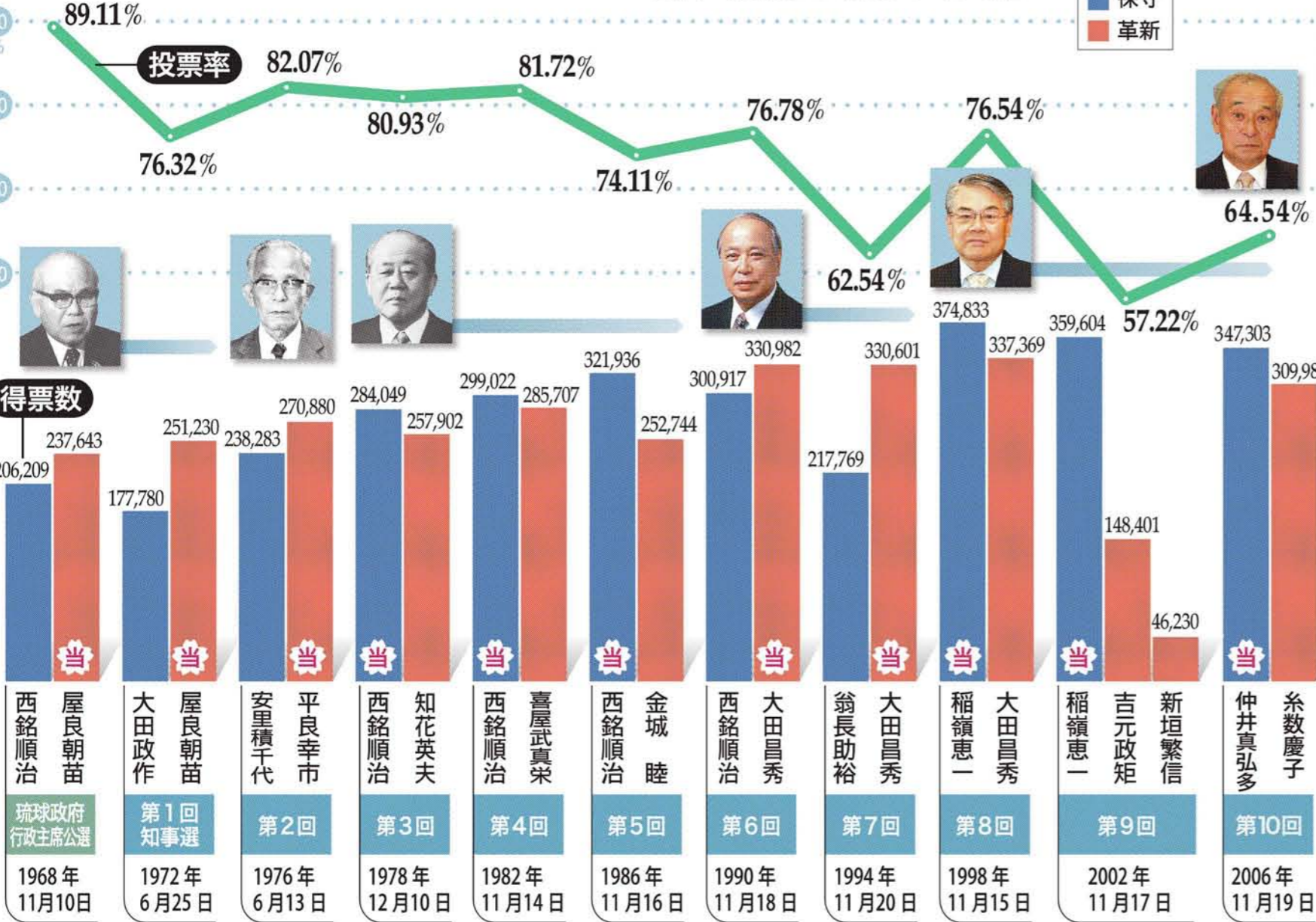
データに見る
知事選
2010

復帰後保守6勝、革新4勝

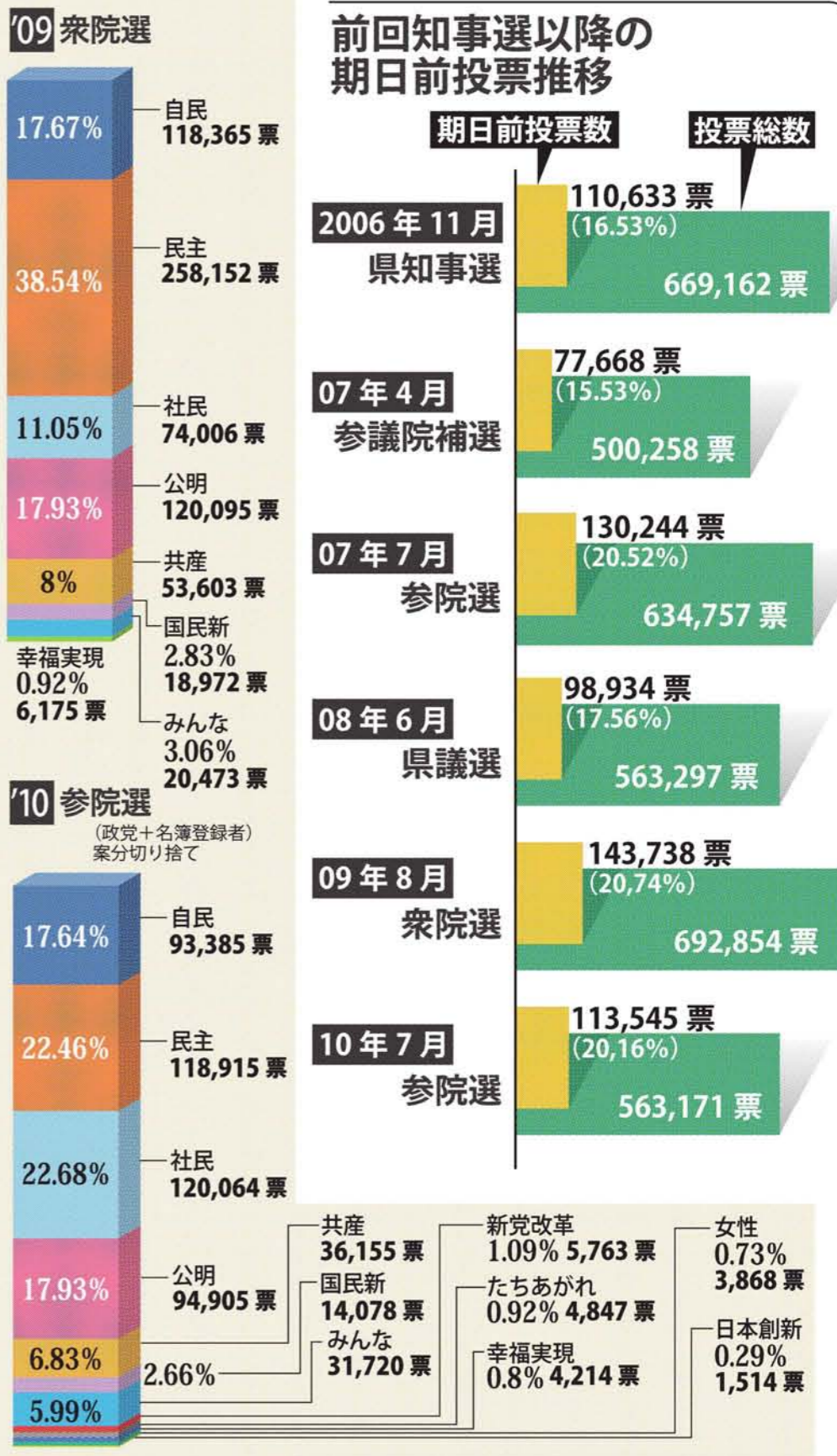
11日告示の第11回県知事選挙は、2期目を目指す無所属現職の仲井真弘多氏(71)=自民県連、公明推薦=と無所属新人の前宜野湾市長・伊波洋一氏(58)=社民、共産、社大推薦=の2人による事実上の一騎打ちとなる。復帰後の県知事選挙を保守の色分けで見た場合、保守6勝、革新4勝となっている。過去10回の県知事選挙の得票数や投票率などのデータをまとめた。(敬称略)

県知事選過去の得票数と投票率の推移

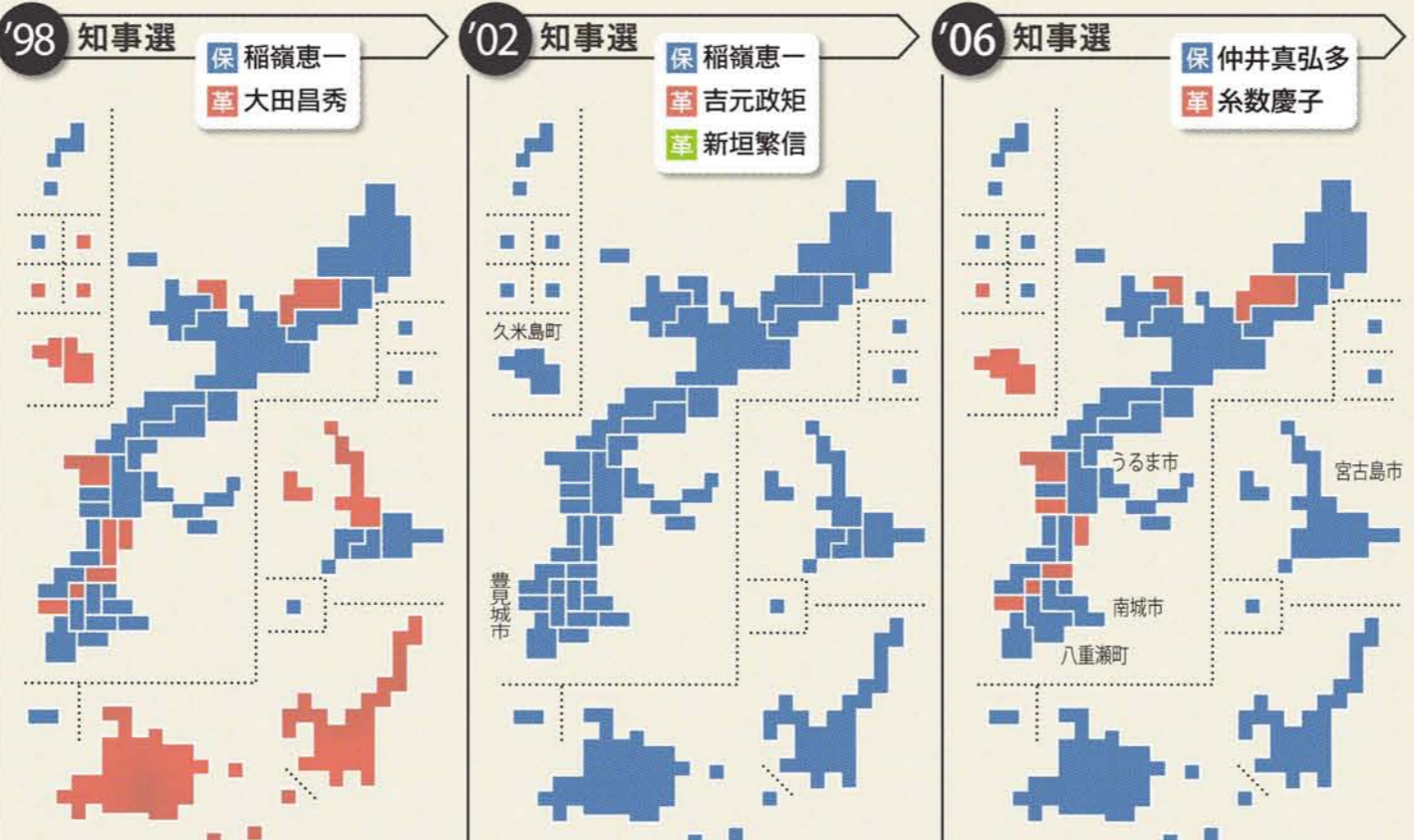
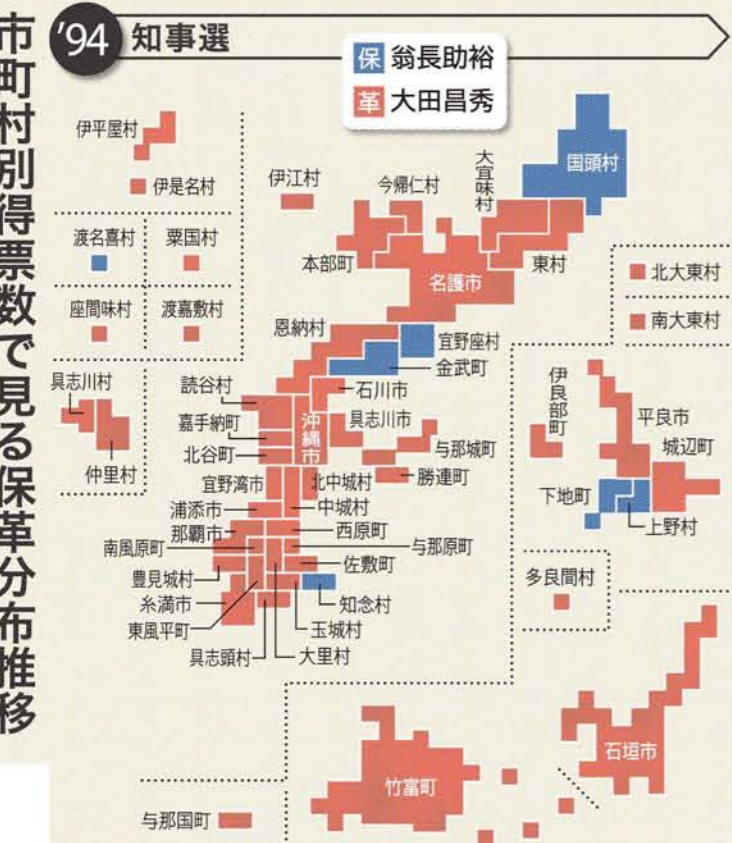
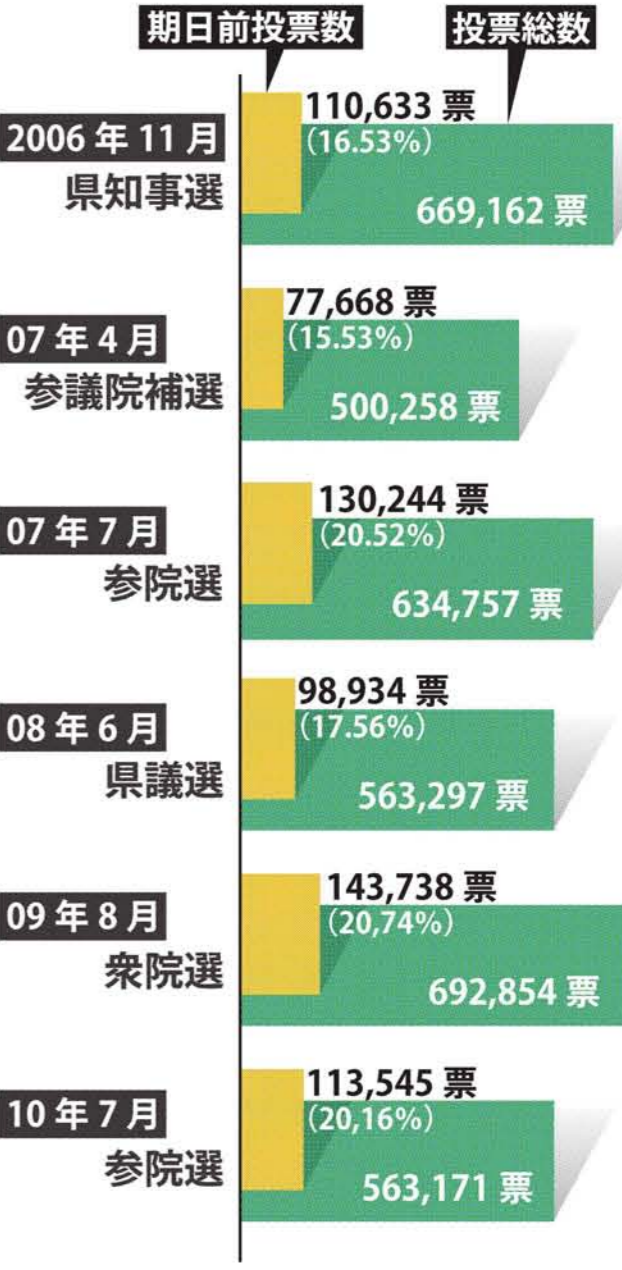
※1. 野底武彦(68年279票)、又吉光雄(98年2,649票、02年4,330票)、屋良朝助(06年6,220票)は省略
※2. 平良幸市は病気療養のため任期途中(78年)で辞任



沖縄県比例代表・党別得票数



前回知事選以降の期日前投票推移



伊波候補 選対アピール

領進市長が誕生、県議会決議、県民大会に続き、9月決着をつけ、県内移設を断念させよう。伊波洋一は、新しい沖縄をつくる。

県民の皆さん、1月に名護市で、海にも陸にも基地が決議された。今度県知事を造らせないと訴える稲波の番だ。伊波洋一知事の新しい沖縄をつくる。

若者たちと一緒に飛躍・発展する沖縄を実現する。仕事と雇用を増やし、医療と福祉を守り、教育を充実させ、誰もが人間らしく安心して暮らせる沖縄を実現する。伊波洋一とともに新しい沖縄をつくる。

伊波候補横顔

宜野湾市職員から県議、宜野湾市長と、一貫して地方自治の現場を歩んできた。普天間基地の県内移設反対をぶれずに主張してきた。辺野古の埋め立てに反対する。沖縄に新しい基地を作らせないと訴え、戦後生まれ初の県知事を目指す。



地方自治の現場歩む

1952年、宜野湾市で生まれる。母・寛子さんは従軍看護婦として沖縄戦に駆り出され、片目を失った。母1人子1人の家庭に育ち、平和な沖縄、安心して暮らせる沖縄をつくるうと胸に刻んだ。

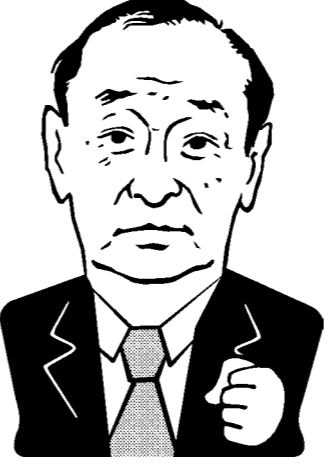
96年、県議選に出馬して政界に転身。2期7年半を務めた後、宜野湾市長に初当選。2期目の2007年、中学生までの入院費無料化を県内自治体で初めて実施。さらに08年には子どもの医療費補助で市への申請手続きがいらない「自動償還払い方式」にし、子育て世代の手間を省いた。

市施設の補修管理など市内零細企業も参入できる小さな公共事業をたくさんつくり「クレーンカー(節約上手)」との評価も。

妻・成子さんとともに大学生と中学生の息子2人。

仲井真候補横顔

通商産業省(現経済産業省)を経て、沖縄電力会長、県商工会議所連合会長などを歴任。大田県政では副知事も務めた。この経歴から「経済の仲井真」を自負し、4年前に県経済界の要請を受けて知事選に立候補、初当選した。



経済界で手腕を発揮

今回は「道半ばの政策もある。もう1期知事の仕事をやらせてほしい。子や孫たちのための道筋をつけた」と再選を目指し出馬する。

1939年大阪府生まれ。戦中は空襲や疎開も経験した。戦後、小学2年時に両親の故郷・沖縄に引き揚げた。父・元楷は方言「ユース」のさきがけ。

東大工学部卒業後、通産省入省。ニューヨークなど勤務し、沖縄総合事務局通商産業部長、工業技術院審議官を務めた。

家族は長女ゆみなさんと「女・知里さん。妻・嘉子さんは脳梗塞で倒れ、2002年に亡くなるまでの約1年半、自宅や病院で付き添いながら献身的に介護。知事初当選後は、2人の娘が常に健康管理に気を遣いながら、公務をこなしてきた。

仲井真候補 選対アピール

今回の選挙、12年前の「閉塞感」漂う「県政不況」へ戻るのが、子や孫の「紀ビジョン」を策定した。

「豊かな未来実現」

未来のために豊かな沖縄を、これを現実にするため、新たな実現するのかが問う重大な選択である。仲井真知事はな沖振法を中心とした様々な施策を打ち出していく。

基地問題に関しては現在の沖縄の負担はあまりにも重く、普天間基地についても「県外移設を求め国民全体で日本の安全保障を考えるべきだ」と主張する。「県民の心をもつに！」を合い言葉に選挙を戦っていく。

必勝誓い、氣勢



伊波洋一氏の出発式で県政奪還に向けて氣勢を上げる支持者—11日午前9時半ごろ、那覇市の県民広場



仲井真弘多氏の出陣式で再選必勝を誓い氣勢を上げる支持者—11日午前9時半ごろ、那覇市の久茂地交差点



告示を迎え、妻の成子さん(奥)とともに仏壇に手を合わせて必勝祈願する伊波洋一氏—11日午前7時10分ごろ、宜野湾市嘉数の自宅



告示を迎え、次女の知里さん(左)とともに神棚に必勝を祈願する仲井真弘多氏(手前)—11日午前7時半ごろ、那覇市牧志の選挙事務所